

J. Lauwerys の cosmic modesty の考え方と廣池千九郎の宇宙自然の法則

岩佐 信道

キーワード：ラワリーズ、cosmic modesty、廣池千九郎、モラロジー、宇宙自然の法則

要旨

イギリスのロンドン大学、教育研究所の比較教育学の教授であったラワリーズは、モラロジー研究所の顧問を務めたが、日本滞在中の講演の中で cosmic modesty ということを強調している。これは、とかく高慢で傲慢になりがちな人間にとって、宇宙や大自然の前で人間がいかにかちっぽけな存在であるかということに自覚することが重要である、との考えである。この考え方は、分子生物学の権威、筑波大学名誉教授の村上和雄が、ミクロの世界の神秘を、「サムシング・グレイト」と呼んでいることとも符合するであろうが、ラワリーズは、モラロジーの理論の中にもこの cosmic modesty の考え方があるということを喝破した。確かに、『道徳科学の論文』の著者、廣池千九郎は、人間のモラルを宇宙の一員として、宇宙自然の法則に従うという観点から論じている。ある意味で、廣池は、宇宙自然の法則とは何かを生涯をかけて明らかにしようとしたということができよう。廣池が人類の教師ともいべき人々の生き方に共通する道徳原理として提示したものは、宇宙の一員としての自覚に基礎をおいているといえる。その意味で、その道徳原理は、cosmic modesty の考え方の積極的かつ徹底的な展開ということができよう。

1. J. Lauwerys の cosmic modesty の考え方

麗澤大学の創立者廣池千九郎は、昭和3年に「新科学モラロジーを確立するための最初の試みとしての」という副題のついた大著『道徳科学の論文』を著した。廣池自身は、当初これを西洋の識者にも読んでほしいと考え、英訳を考えていた。しかし、その英語版の出版はようやく2005年に実現した。したがって、『道徳科学の論文』に込められたモラロジーのメッセージが広く世界の人々に理解されることにはならなかった。そうした中、モラロジーに深い理解を示した国際的知識人をあげるとすれば、日本人では、国際連盟の事務次長を務め、『道徳科学の論文』に序文を書いた新渡戸稲造を、また西洋人では、イギリス、ロンドン大学の教育研究所の比較教育学の教授であったラワリーズ (Joseph A. Lauwerys, 1902-1981) をあげることができるであろう。

この二人のうち、ラワリーズは、第二次世界大戦中、ロンドンで定期的に開かれた連合国文部大臣会議のもとに設けられた戦後の教育に関する特別教育問題委員会の委員長としてユネスコの創設に重要な役割を果たしたことで知られている (Oxford Dictionary of National Biography や Institute of Education, University of London の Archives における Joseph A. Lauwerys の項目参照)。彼は1975年にはじめてモラロジー研究所を訪問し、1977年にはモラロジー研究所の顧問に就任している。度重なるモラロジー研究所訪問のたびに研究会や講演をおこなっている。「人生の意義」と題された講演では、自分の生い立ちから、受けた教育、恩師、研究上の経歴などに触れている。そして、ユネスコの創設に関連して、ユネスコ憲章の前文にある有名な文

章、すなわち「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という文言を提案したエピソードについても語っている(ラワリーズ、1980, 1981)。このように見てくると、モラロジーに深い理解を示した二人の国際的知識人は、期せずして、国家や文明・文化の違いを越えて人類の協力を追求した人物ということができる。すなわち、新渡戸は国際連盟の事務次長として、ユネスコの前進といわれる国際知的協力委員会を組織し、ラワリーズは、ユネスコそのものの創設に直接かかわっているのである。

さて、ラワリーズは、モラロジー研究所主催の「民主主義教育とモラロジー」と題された教育者対象の講演で、民主的な市民としてもつべき特性として、平和を愛すること、人生を尊重すること、に加え、*cosmic modesty* ということについて次のように述べている。

宇宙というものは実に広大で、しかも、その中に秩序と統一があります。人間はその中の小さな一部にすぎません。*cosmic modesty* とは、そういう意味における謙虚さであります。……

私自身を含めてすべての人々が大きな夢を描くのでありますが、同時にまた、傲慢になる危険性をもっております。私たちは他の人々のこと、政府のこと、あるいはその他もろもろのことについて常に批判をするのでありますが、その批判をする心の中には、自分の批判が一番正しく、極端に言えば、絶対にまちがっていないというような横柄な考え方があると思います。

そのような人間の横柄さ、傲慢さを抑える一番よい方法は、この大きな宇宙全体について瞑想をしてみることであります。この宇宙に広がっている非常にたくさんの星、しかも、その一つ一つが大きなたくさんの星、宇宙全体の大きさ、自然の大きな力、等々を考えます時、私たち一人一人はいかに微々たる存在であるかということを感じて、そこに謙虚さが生まれてくると思います。

また、そういう大きな宇宙ばかりでなく、道端に咲いている小さな花を見ましても、なんと美しいものであるか、小さな種からこんな美しい花がどうしてできてくるのであろうかと私たちは驚嘆します。あるいは、夕方、沈む夕日を背景に飛ぶかわいらしいトンボの姿を見ましても、なんとすばらしいものかと感動します。そういう情景の中に私たちは自然の奇跡を見取ります。そして、そういうものを見ることによって、自分のしていることがいかに小さなことであるかという謙虚さを感じることもできるのであります。

(ラワリーズ、1977, P. 9)

また、研究会での *cosmic modesty* に関する質問に、次のように応答している。

私がこの言葉で示そうとしたことは、人間が宇宙全体を眺めてみる時にいかに畏敬の感情と、いかに人間が小さいかという感情です。つまり、私たちが無限の星々を眺めたり、草花の美しさを眺める時、私たちはもっと謙虚でなければならないし、傲慢であってはならないということがわかるのです。そして私は、ここでの *cosmic* (宇宙的) という言葉を強調したいと思います。この言葉は、ものごとの全体は混沌ではなく、秩序ある体系としての宇宙を意味しています。そしてここに宗教的感情の始まりをたどることができると思います(モラロジー研究所研究部、1978, p. 112)。

こうしたラワリーズの *cosmic modesty* の考え方は、次のようにまとめることができよう。

- ① 宇宙は実に広大である。

- ② その宇宙には秩序と統一がある。
- ③ 宇宙とは、天文学的な宇宙だけではなく、生き物や自然など地上のすべての存在が含まれる。
- ④ 人間は、とかく、すべて自分が正しいと考え、横柄で、傲慢になりがちである。
- ⑤ そのような人間は、宇宙の前で、いかにちっぽけな、無力な存在であるかということを経験するとき、謙虚になることができる。

さらにラワリーズは、この cosmic modesty の考え方を、モラロジーの体系の中にも読みとっていた。すなわちラワリーズは、「人生の意義」と題された講演の中で、モラロジーの科学的な理論体系の特色を列挙しているが、その中で、モラロジーは、人間が自然と一体であると考えていること、人類同胞に対する大きな愛情の重要性を強調していること、人間の理性、科学的な思考の重要性の強調をあげ、さらにモラロジーには、cosmic modesty の考え方が見られることについて次のように述べている。

私たち人間の見たり聞いたりさわったり、というような感覚を超えて、私たちのまわり、この自然・大宇宙の中に大きな目に見えない力があるということ、そしてその大きな宇宙の神秘、力に対して、神と申しましょうか（モラロジーでは宇宙自然の法則と申されているわけですが）、そういう大きな力、深い大きい魂や心に対しまして、私たち人間は畏れの気持ち、謙譲の気持ちをもつということの必要性が深くモラロジーの中で感じられたことです。（ラワリーズ、1981、P. 9）

ラワリーズがモラロジーの理論に接した頃、『道徳科学の論文』の英語版の下訳はかなり進んでいたため、重要な部分の英語訳に目を通すことはできたし、『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』などのモラロジー概論書の英訳本は手にすることができた。ラワリーズは、そのような情報を通じてモラロジーに関して本質的な理解をもっていたようで、モラロジーの中に次のような要素を見ていたことが確認できる。すなわち、

- ① モラロジーには、自然・大宇宙の中に大きな目に見えない力があるという哲学があること、
 - ② モラロジーは、その自然・大宇宙の力を「宇宙自然の法則」と呼び、時に「神」とも呼んでいること、
 - ③ モラロジーには、人間は、その大きな宇宙の神秘、力に対して、畏れの気持ち、謙譲の気持ちをもつということが必要であるという認識があること、
- である。

比較教育学の研究で文学博士号を取得する前に理学博士号を取得するなど、科学的素養の深かったラワリーズにとって、cosmic modesty の考え方は、とかく横柄で、傲慢になりがちな人間が、己の分限を自覚して謙虚になるという、人間の生き方の基本を述べたものといえよう。しかし、ラワリーズにおける宇宙とは、必ずしも天文学的な宇宙に限られるものではない。道端の草花や、沈む夕日を背景に飛ぶトンボを例にあげているように、私たちに身近なさまざまな事物を含むものである。人間は、普段、そのようなものを特別なものとも考えず、見過ごしているのであるが、改めてそれらに目を向ける時、それぞれのものの美しさ、いのちの神秘さに驚嘆するのである。このようなラワリーズの考え方からすれば、cosmic modesty とは、宇宙を構成しているすべてのものに対する透徹したまなざしであり、そうした宇宙における人間の位置を自覚した謙虚な態度ということができるであろう。ラワリーズが、モラロジーの理論体系の中に cosmic modesty の

基本的な特質をいち早く見だし、強調したことは、今日改めて注目に値するといえよう。

2. ミクロの宇宙に対する敬虔な態度—村上和雄の「サムシング・グレート」

地球上の全ての事象が、宇宙現象の一部であることを考えれば、cosmic modesty の考え方は、大宇宙を前にした時ばかりでなく、私たちの身近な情景や世界を通して経験されるとしても不思議はない。その点からすれば、高血圧の原因となる酵素、レノンの遺伝子解読を世界で初めて成し遂げた筑波大学名誉教授の村上和雄が、マクロの宇宙でなく、遺伝子というミクロの世界の神秘を、「サムシング・グレート」と呼んでいるのも、ラワリーズが cosmic modesty と呼ぶ考え方と通じるようなところがあるように思われる。村上は、「人間を超えた巨大なるもの」すなわち「サムシング・グレート」と、人間が到達した科学の知識を次のように対比している。

遺伝子の科学はたしかに素晴らしい進歩をした。これは大腸菌という、数十億年前に誕生した細胞一つで生きている、生物として最も簡単なものを、分子生物学者が集中攻撃し、輝かしい成果を収めたからである。この中から多くのノーベル賞受賞者を出した。・・・しかし、世界の科学者が束になっても、大腸菌そのものはいまだにつくれないのが、科学の最先端の現況である。

これは、私どものもっている知識に比較して、生物のもっている未知の部分がけたはずれに多く、特に生命の誕生や、いのちそのものについては、科学はまだほとんど何も知らないからである。これは、科学がとるにたらないからではなく、生物があまりにも素晴らしいからだともいえる。

これらの研究を通して、私どもは自分の力で生きているのではなく、大きな力によって生かされていることを実感している。サムシング・グレートの実姿はあまりにも大きく私ども凡人にはなかなかつかまえない。 (村上、1999, p. 20)

また、村上は、モラロジー研究所での講演でもサムシング・グレートについて、分かりやすく述べている。

私も、その遺伝子暗号を読んで、時には「これは私どもの解読した遺伝子暗号だ」と自慢していました。しかしある時、この遺伝子暗号を読みながら、読める技術もすごいけれども、もっともすごいことがあるのに気がつきました。それは読む前に書いてあるということです。書いてあるから読めるのです。書いた人と読んでいる人とではどちらが偉いかといえば、書いた人に決まっています。誰が遺伝子を書いたのでしょうか。・・・誰が書いたかということ、自然が書いたのです。・・・

遺伝子の情報量は万卷の書物に匹敵します。・・・しかもその情報量が想像を絶するほど小さなところに入っています。・・・仮に世界中の人の遺伝子の細胞一個を集めると約60億個になります。それがなんと一粒のお米に書き込んである計算になります。しかも、それが間違いなく働いているのです。これは人間業ではないことは確かです。この人間業でないことを神業とか仏の働きといいます。・・・

とにかく、人間業ではない働きがあることは間違いありません。それを私は「サムシング・グレート」と呼んでいます。信仰のある人は神様や仏様というふうに考えていただいても結構です。・・・サムシングですから、今の科学ではよくわからない「何か」です。そして、たい

へんグレイト (偉大) な存在と働きがあるということは確かなのです (村上、2000, P. 38~40)。

私は宇宙に行ったことはありませんが、細胞の中の遺伝子の世界に入ってみると、細胞一つといえども宇宙に匹敵する秘密が隠されています。ミクロとマクロで違いますが、そこに見るものは、要するに命のすばらしさ、偉大さ、そして有り難さなのです。・・・

ですから、自分の力で生きている人など一人もいないのです。人間は水がなければ、太陽がなければ、空気がなければ、地球がなければ生きていけません。植物や動物、まして自分以外の人々がいなければ人間は生きていけないのです。みんな、そのような大自然のお陰で生かされているわけです。(村上、2000, P. 61)

村上は、分子生物学の権威として、人間の遺伝子という極微の世界にも人間の理解や創造力の遠く及ばない、大宇宙に匹敵する神秘があることを強調しているが、同時に、宇宙を構成する空気、水、地球、太陽など、人間の生活を支えているすべてのものへの敬虔と感謝の大切さを強調している。このようなサムシング・グレイトの考え方は、根本において、ラワリーズの cosmic modesty の考え方と符合するといえるであろう。

3. cosmic modesty の考え方からみたモラロジー

廣池千九郎は、自分自身で cosmic modesty という言葉を使ってはいない。しかし、ラワリーズがモラロジーの中に見出した既述のような cosmic modesty の考え方の特質は、モラロジーの本質にかかわるものといえよう。むしろ、モラロジーにおける cosmic modesty 的な考え方は、実は、ラワリーズがその講演で説明しているものよりももっと積極的で、もっと徹底的なものといえるかもしれない。そこで、モラロジーの理論体系を cosmic modesty という観点から整理してみよう。

(1) 人間は宇宙の一員として宇宙自然の法則に従う、という考え方

廣池の『道徳科学の論文』において、ラワリーズのいう cosmic modesty の考え方を思い起こさせるのは、人間の生き方を宇宙から説き起こす第二版自序文の冒頭であろう。

天地剖判して宇宙現出し、森羅万象この間に存在して、いわゆる宇宙の現象を成すに至れるは、偶然にして然ることは出来ないのである。必ずやその原理もしくは法則ありてここに至れるものである。故に宇宙間に産出してこの間に生存するところのわれわれ人間としては、この宇宙自然の法則に従わねばならぬことは明らかであります。この故に聖人はこの宇宙自然の法則を天地の公道とも称せられたのである。すなわち、いわゆる「公の道」という名のごとくに、何人も必ず遵守せねばならぬ道であるのです。さればこれに従うものは進化し、これに反するものは退化すと教えられ、しこうして諸聖人窮親らこれを実行して、われわれに御示くださったのであります。(廣池、1985、① p. 1)

ここで廣池は、まず人間を、基本的に、宇宙現象の一つとしてとらえ、その生き方を、広大な宇宙の中に位置づけて考える必要から説き起こしている。廣池が「宇宙自然の法則に従わねばならぬ・・・」といい、「何人も必ず遵守せねばならぬ道」という時、そこには、ただ広大な宇宙の前で謙虚になるだけでなく、できることならその本質もしくは実質 (心) を理解し、それに近づきたいという積極的かつ意欲的な姿勢を見て取ることができる。このような廣池の態度は、ラ

ワリーズの基本的もしくは素朴な cosmic modesty の考え方に対して、広義かつ積極的な cosmic modesty の考え方と呼ぶことができるかもしれない。

さらに、そのような意味での廣池の cosmic modesty 的考え方は、宇宙の中での自己の立場を自覚した人間の、地上における生き方を貫く根本的な原理ということがふさわしいように思う。そのことは、上記の引用文に続く次の文章からも明らかであり、廣池は、そうした宇宙自然の法則の本質を、科学的観点から「相互扶助の原理」として受け止めるのである。

さて「天地の公道」すなわち「人間としては何人も行わねばならぬところの道」と申すのは、この宇宙の組織されておる原理を指すので、その原理と申すは、万物相互に助け合うこと、すなわち相互扶助の原理によりて、万有が階級的にもしくは平等的に調和し、もってこの宇宙が組織されておることであるのです。・・・そこで一例を挙げれば、たとえば、動、植、鉱物相互に交換作用を発揮して、あるいは階級的に、あるいは平等的に、相寄り相助けて存在し、動物の仲間はまたその仲間で相互に交換作用によりて、あるいは階級的に、あるいは平等的に相寄り相助けて生存しておることであるのです。・・・しこうして、人間が自我を離れて、かかる真理を物質的だけでなく、精神的に、人心の開発を目的にして行う場合に、「人間が天地の公道に従うた」と申さるのであります。すなわち、人間が利己的本能を去って、純真至誠の精神にて、比例的慈悲もしくは比例的待遇を実現して、人心の開発を目標に努力する場合に、はじめて「人間が天地の公道に従うた」といい得るのであります。一切の現象は変化すれども、われわれ人間が天地の公道に従い、最高道徳を実行して、安心、平和及び幸福の生活を営めば、進化するという事実は、古今東西、一定不変の真理であるのです。(廣池、1985、① p. 1～4)

以上引用した『道徳科学の論文』の第二版自序文の二つの文章から明らかなように、廣池の cosmic modesty 論ともいうべきものは、まず、人間を宇宙の一つの現象としてとらえるところから始まり、次のような展開を見せ、最終的に、その実質は、最高道徳として提示されるのである。

- イ、宇宙は偶然に、無秩序に運行しているのではなく、必ずその法則に従って動いている。
- ロ、人間は、その宇宙の一つの現象としてこの地球上に存在している。
- ハ、宇宙の一員である人間は、この宇宙の法則に従わなければならない。
- ニ、それは、この宇宙が組織されている原理であり、その実質は「相互扶助の原理」である。
- ホ、聖人は、これを「天地の公道」と呼び、自らそれに従った生き方を人間社会で実現した。
- ヘ、そこに共通する生き方の実質は、最高道徳と呼ぶことができる。
- ト、これに従うものは進化する、反する者は退化する。

このように、廣池は、倫理・道徳を論じる時、常に、人間が宇宙の一員であるという事実から説き起こしているということができ、3,000 頁にもものぼる『道徳科学の論文』によって明らかにした最高道徳とは、廣池による宇宙自然の法則の実質、内容の積極的かつ徹底的展開と考えることができよう。

(2) 廣池における宇宙自然の法則の探求の歩み

廣池は、最晩年、自分の宇宙自然の法則の本質探究の過程を述懐して、次のように述べている。

そこで、神様というものは何かというと、この大宇宙が神の肉体であって、宇宙自然の法則が神の精神であり、しこうしてこの大宇宙の一部をなすところの人間の身体は小宇宙である

ことが自然科学と精神科学との総合的研究によって明らかに窺われることになったのです。そこで、人間はこの大宇宙の一部であるから、この大宇宙の法則に従うものが進化し、これに反するものが退化することもわかったのであります。しこうして、これは私が発明したものではありません。西洋の学者がもはや大体はそういうおるのであります。そこで、天地の法則を研究するということが大きなことであるということが解ったのであります。そこで、天地の法則は我が皇祖皇宗のご宏謨とこれに一致する世界諸聖人の教説と事績とであることも分かってきたのです。さて、そこで学問はいろいろに分かれて、法律学・政治学・経済学・何々学となっておれど、それは親指・小指・人差し指というようなものであるので、その指を一々研究するよりは結局その各指のもとになっておる腕を研究したら親指も小指も人差し指も皆大体は分かるということが解ったのです。そこで始めて万有科学の基礎学としての道徳科学の研究というものを思い立ったのであります。すなわち天地の法則というものは何であるかということの研究を思い立ったのであります。それが、道徳科学の始まりで、私の歳正に三十前後のころ何年何月何日という細かいことは解らぬが大体この頃であったのです。（廣池、1991, p.212～213）

ここには、人間が宗教的に神と呼ぶものと宇宙との関係についての廣池の大胆かつ明解な見解が示されている。すなわち、この大宇宙が神の肉体であって、宇宙自然の法則が神の精神であり、この大宇宙の一部である人間の身体は小宇宙であるという考えである。そして、大宇宙もしくは宇宙自然の法則の本質とは何かを明らかにするという尋常ならざる、壮大な試みに真正面から取り組んでいたこと、しかもそれが30歳ごろから始まったことが語られている。廣池は、その独自の構想もしくは体系を「万有科学の基礎学」と名付けてその研究に邁進し、それが後に、道徳科学（モラロジー）として具体的に結実するのである。ここからも、廣池における宇宙自然の法則の本質を明らかにする努力が、いかに徹底したものであるかがわかる。

(3) 「天道を信じる」ということ — それは最高道徳実行の根本原理

廣池は、『道徳科学の論文』の第二巻を「最高道徳の大綱」としてまとめているが、その前半の目次の構成は極めて重要な事実を物語っている。すなわち、「慈悲にして寛大なる心となり、かつ自己に反省す」という格言は、廣池が大正4年、最も困難な境遇の中で体得した最高道徳の真精神を表現するものである。したがって、廣池は、次のように、「第3章 最高道徳実行の第一根本精神」において、唯一この格言だけをとりあげ、続く第4章で、「父母の心をもって人類を愛す」をはじめとする5つの格言を「最高道徳実行の第二根本精神」としてあげている。

第二巻 最高道徳の大綱（目次）

第一章 最高道徳実行の諸項目の制定さるに至りし原因及び順序

第二章 最高道徳実行の根本原理

（一）自ら運命の責めを負うて感謝す

（二）現象の理を悟りて無我となる

（三）自ら運命の責めを負うて感謝す

第三章 最高道徳実行の第一根本精神

慈悲にして寛大なる心となり且つ自己に反省す

第四章 最高道徳実行の第二根本精神

- (一) 父母の心をもって人類を愛す
- (二) 我これをなすにあらずして、ただこれに服するのみ
- (三) 他を救うにあらずして己を助くにあることを悟る
- (四) 意なく必なく固なく我なし
- (五) 大法は心にあり小法は形にあり

しかし、ここで注目すべきことは、廣池が、これら最高道德実行の根本精神を個別的に論じるに先だって、「第二章 最高道德実行の根本原理」を立て、そこで(1)「深く天道を信じて安心し立命す」、(2)「現象の理を悟りて無我となる」、(3)「自ら運命の責めを負うて感謝す」の3つの格言をあげていることである。特に(1)と(2)の格言は、人間の生き方の根本原理として、人間が宇宙の一員であるという広い視野に立ったとらえ方そのもので、これこそ、廣池における cosmic modesty の考え方の核心といえるであろう。

まず、(1)「深く天道を信じて安心し立命す」という格言について、廣池は次のような説明をしている。「天道は中国語にして、神道もしくは天理等と同じく、神の法則すなわち換言すれば自然の法則ということであります(廣池、1985、⑨ p.285)」と述べ、この天道もしくは宇宙自然の法則に従って最高道德を実行すれば必ず幸福になるという人間の精神作用と行為に関する因果律を確信することが重要である、というのである。続いて(2)「現象の理を悟りて無我となる」の格言について、廣池は次のように述べる。「我々人間は宇宙現象の一つとしてこの地球上に現れてきて、かつその宇宙の勢力に支配されておるものなれば、すべて自然の法則すなわち神の真意に従うほか、方法なきことを自覚するのが、最高道德実行の根本原理であります(廣池、1985、⑨ p.286)」と。

さらに、(3)「自ら運命の責めを負うて感謝す」の格言については、廣池は「自己の運命の成立せる原因を悟り、しこうしてその運命改善の責任を自己に負うて感謝生活をするということは、人間生活の根本を自覚したものであるべきであります。ゆえに、この自覚は最高道德実行の根本原理をなすものであります(廣池、1985、⑨ p.286)」というのであるが、ここで「運命」ということも、(2)の格言の「現象の理・・・」で廣池が指摘するように、「我々人間は宇宙現象の一つとしてこの地球上に現れてきて、かつその宇宙の勢力に支配されておる」ということと深いつながりがあることであり、廣池のこうした受け止め方には、ラワリーズが cosmic modesty と呼んで評価した宇宙の一員としての人間の立場の自覚が積極的かつ徹底した形で展開されているということができよう。

(4) 天道を信じるということは因果律を信じること

これまでとりあげてきた廣池の文章から明らかなように、廣池にとって、天道とは、ほかならぬ宇宙自然の法則のことであり、それに従うということは、聖人たちが自ら実行して示した最高道德を実行することであった。そして、もう一つ重要なことは、廣池にとって、天道もしくは宇宙自然の法則の中身に一致する最高道德を実行するということは、宇宙の一員として生きる人間の最も価値ある生き方であるとともに、そのような生き方は、宇宙自然の法則に守られるという確信につながるのである。したがって、廣池は「最高道德を実行すれば人間は必ず幸福になる」と強調するのである。

このような廣池の宇宙自然の法則のとらえ方は、学問としてのモラロジーの特色の一つである因果律の考え方に深くかかわっている。すなわち、廣池は、『道德科学の論文』の第一巻第一章

の最初に、モラロジーを「因襲的道德及び最高道德の原理・実質及び内容を比較研究するとともにその実行の効果を科学的に証明しようとする新科学」と定義している。

廣池にとって、この因果律の存在に関する確信は、宇宙の一員としての人間の生き方の基本であり、この点の重要性は、『道德科学の論文』第一版自序の最初の段落で次のように訴えていることから明らかである。

現代の精神科学においては人間の精神作用及び行為に因果律の存在することを疑い、且つ道德もしくは不道德の実行の報酬はおのおのその実行当事者の負担するところに係り、しかのみならず、その当事者の受くるところの報酬は、その相手方及び第三者の受くるところの報酬よりも更に大なることを証明する学問及び教育これなきが故に、世界人類の大多数はただ単にあらゆる知力及び政策に依拠して、自己及び自己の団体を利せんとするの傾向を生ずるに至れるなり。もし人間にしてかくのごとくその精神作用及び行為に因果の法則なしと思うものならば、その人はいかに知的に政策を弄して道德的行為を現すも、これみな虚偽の行動にすぎず。しこうして現代にはかかる虚偽の人間はなほだ多し。

されば、今日かかる人間の虚偽を矯正し因果の法則を確信するところの真人間を作るにあらずんば、個人ならびに社会の真の安心及び幸福をば実現し得ざるべし。(廣池、1985、① p. 85～86)

廣池は、『道德科学の論文』の第一巻最後の「第十五章 最高道德実行の効果に関する考察」で因果律をあらためて論じるのである。

(5) cosmic modesty の考え方の具体的展開としての最高道德の実行

廣池は、『道德科学の論文』の初版(昭和3年)で始めて体系的に論じた最高道德について、第二版(昭和9年)の自序文では、「この最高道德と申すは、宇宙自然の法則、天地の公道もしくは人類進化の法則であって、人間実生活の一切の規則であるのですから、その内容は千種無限であれど、これを概括すれば5か条となる(廣池、1985、① p. 29)として、自我没却の原理、神の原理、義務先行の原理、伝統の原理、人心の開發もしくは救済の原理をあげ、それぞれについて簡潔な説明をしている。最高道德をこのような5つの原理で概括することは初版の『道德科学の論文』にはないことで、一般の人々にモラロジーと最高道德をわかりやすく説明しようとした昭和5年の『特質』に始まり、第二版自序文でも踏襲されていることである。廣池にとって、最高道德とは宇宙自然の法則もしくは天地の公道であることが最も重要なのであって、「その内容は千種無限」であるにもかかわらず、あえて5つに概括したものが上記の原理なのである。私たちは、とかく、これらの5大原理そのものに注目しがちであるが、廣池は、それらを説明するにあたって、絶えず、人間が宇宙の一員として生きていることから説き起こしている。そのことを以下、各原理について見ていくが、cosmic modesty の考え方との関連で考察する観点から、自我没却の原理から始まる上記の順序とは別の順序で取り上げる。

① 万物生成化育の心(正義と慈悲)の実現(神の原理)

この原理に該当する『道德科学の論文』の記述は、第14章の第5項と第8項である。まず、第5項は「最高道德の基礎的觀念の第一は正義および慈悲にあること及びその両者の作用」と題されており、その第1節は「正義および慈悲の淵源」という表題の下に「学問上より見たる神の本質」という説明が付されている。これは、最高道德の第一の基礎的觀念の各論を展開するに先

立って、その位置づけを示すものである。

古来、世界の諸聖人及び大識者は一般に神<本体>の本質をもって正義及び慈悲となしておるのであります。・・・しこうして真の正直者はただ神のみであって、人間は必ずしも正直ではないのであります。また真の慈悲はその正直にして公平なる神の心に存するのであります。人間は必ずしもかくのごとくではありません。故に、真の正義及び慈悲は結局、神の心に淵源するものであるということが出来ます。かくて、いわゆる最高道德の実行とは実にこの慈悲と正義との両者を適当に調和し、かつ適当なる方法によって、これを人間社会に実現することにあるのです。(廣池、1985、⑦ p. 50~51)

このように、最高道德の第一の基礎的観念である正義と慈悲の淵源は神もしくは本体であり、「神を信じる」という意味での最高道德の実行は、正義と慈悲を適当な方法で人間社会に実現することであるというのである。続いて、第5項の各論では、まず、正義の観念を自然法との関連で論じ、さらに、正義を宇宙的正義と人間のものもしくは社会的正義に区別して、宇宙的正義の本質を聖人の教説・事績を基礎にして、慈悲と一体であることにまで議論を展開している。

また、この原理に関するもう一つの項である第8項は「最高道德は絶対神の存在を認む」と題されており、人間にとって神を信じるとはどういうことを意味するかについて、神、宇宙根本唯一の神、宇宙の本体、聖人の関係などにふれながら、次のように述べている。

最高道德は宇宙根本唯一の神の心を体得実現せる世界諸聖人の実行せるところの道德に一貫せる最高原理であります。故にその当然の結果として神の存在を認むるのであります。しこうして、いわゆる宇宙根本唯一の神は宇宙の本体を指すのであります。(廣池、1985、⑦ p. 221)

現代の科学は、明らかに宇宙自然の現象にその法則あることを発見して、各科学の原理を確立して進みつつあるのです。・・・しこうしてこの自然及び人為の法則をもって宇宙的精神の作用と見なすことは学問上あえて差し支えはないことでありましょう。しからば、人間は、直接に本体を認めることをえざるも、その本体の作用を認めて、その因果律的確偉大な勢力を崇拜して、これを神と思惟することは不合理な思想もしくは観念ではありますまい。(廣池、1985、⑦ p. 223)

神の実質は世界諸聖人の教説、教訓及びその実行上に一貫するところの事績より推せばいわゆる慈悲であるので、その作用はいわゆる自然の法則であるのです。(廣池、1985、⑦ p. 239)

最高道德において神を信ずるということは神の法則を信ずることであり、神の法則とは自然の法則にて、すなわち宇宙の因果律であります。しかしこれは純物理学的因果律のみでなく、人間の精神作用及び行為の因果律をも含むのであります。(廣池、1985、⑦ p. 243)

こうして廣池は、結局「神を信ずるということは神の定めたる法則すなわち道德を実行することである」というのである。

② 小我を捨てて大我に同化する(自我没却の原理)

最高道德の原理のうち、cosmic modestyの基礎的な観念に最も近いものは、この項目といえよう。このことを改めて廣池千九郎の言葉で確認しておこう。

私ども人間は、・・・この宇宙の自然界に発生したる現象の一つであって、この自然界の支配を受けて生存競争もしく変化を遂ぐるのであります。且つ私ども人間は、他の無機物もしくは有機物と異なり、自由意志を有して、外界の勢力に適応することを得れど、それもある程度までにして、絶対的のものでなく、ついに自然の勢力に対しては、ほとんど無力のごとくに屈服せねばならぬのであります。

ここにおいて、人類は、つとに聖人の教説に基づきて、その大自然の本体（神）に信頼してその生存を全くせむとしたのであります。・・・

しこうして、いまモラロジーは、当該見地より、全世界の人類に向かい、これをして世界諸聖人の教説を尊重し、且つ公平無私なる科学の教うることを顧み、各自の学力・知力・体力・金力及び権力にのみ依拠することをやめ、ただ一意専心に、大自然の根本法則すなわち神の法則に合致することに努力させようとするのであります。（廣池、1985、⑦ p. 170～171）

さらに、続けて

故に聖人はこの原理を悟って教えを立て、人間をして小我を捨てて大我に同化しつつ努力せしむるよう教えたのであります。（廣池、1985、⑦ p. 172）

③ 恩人の系列を尊重し、それに報恩する（伝統の原理）

人間社会には、大自然の万物生成化育の働きを担い、私たちの生活を支えている存在がある。それは、今日まで私たちの生活を肉体的、社会的、精神的領域で維持、発展させてきた大切な存在であり、その大きな恩恵に気づき、感謝と報恩を心がけることが、宇宙の一員としての人間の重要な生き方である。『道徳科学の論文』第14章第9項では、その重要な恩人の系列（line of succession）を表す述語として ortholimon という言葉を作り、日本語では「伝統」という言葉を充てている。そして、次のように述べている。

最高道徳にて「伝統」と申しますのは、神<本体>および聖人よりその精神を受け継ぎておるところの一つの系列の総称であります。いまこれによれば伝統とは我々人類の肉体的および精神的生活を創造し、もしくは進化せしむるところの純粹正当の系列を指すのであります。故に、これは重大なる人類社会の根本的法則であります。かくてこの系列に属する先行者全部は我々人類の生活の根本をなすものでありますから、実に人類に対する大恩恵者であります。されば、最高道徳にていわゆる伝統は人類の生活上重大なる意味を有しておるのであります。（廣池、1985、⑦ p. 261）

さらに伝統報恩に関して次のように述べている。

伝統に対する報恩の原理の第一は、万物がこの宇宙間に現出し、我々人間がその中に生まれ出で、かくて生物の法則により、旧は新を育て、新は旧を養い、漸次にこの宇宙を開拓するところの事実すなわち真理さらに換言すれば人間が天功を助くるところの宇宙間の系列の一員としての義務を尽くさねばならぬという事実を大悟し、しこうしてその真理大悟の結果としてその根本を培養せむと欲するに至るところの人間社会における公明正大なる自然的道徳法であります。（廣池、1985、⑦ p. 270）

ここには、重要な恩人の系列に対する報恩ということが、「宇宙間の系列の一員としての義

務」という表現で説明されている。Cosmic modesty という観点の面目躍如といえるであろう。

④ 進んで自己の務めを実行する（義務先行の原理）

この義務先行の原理は『道徳科学の論文』では第14章第6項で集中的に扱われている。そこでは、まず人間の幸福上第一の要件はその人格及び権利の程度を高めることにあるが、そのためには人格及び権利の発生の原理を知悉してその原理に適応しなければならないということから出発する。そのために廣池の専門であった中国法と最近諸科学の結論から、各個人の人格・権利及び境遇はその人の精神作用と行動によるもので、人間一切の権利は、義務先行の精神作用および義務的行動より生じるものであることを論じている。ここには、法律上の権利に関連して、権利は義務の先行より生じるという義務先行の原理の一面を色濃く反映しているといえるであろう。しかし、ここでいう義務先行の原理は、必ずしも法律論だけでなく、Cosmic modesty の基本的考え方として提示されていると考えることができる。廣池は次のように述べている。

聖人の教説および実行によれば、私どもの生命・財産および自由は神の所有であります。＜第3章に人間は自然の中から生まれ出でたという事実に一致す＞ しかるに私どもはこれを放縱的に使用せる故に解脱とか贖罪とかの必要が起こったので、これをもって私どもの一切の権利もしくは幸福は、自ずからその義務を先行するよりほかに方法なきことに帰するのであります。すなわち語をかえていうならば、人類の一切の行為は、結局当該負債償却のためでなければならぬのでありますから、私どもの精神作用および行為は常に義務先行的でなければならぬのであります。（廣池、1985、⑦ p. 141～142）

としている。しかるに、ここで改めて注目すべき点は、上記「伝統に対する報恩の原理の第一」として述べていることに深く関係している。すなわち、「旧は新を育て、新は旧を養い、漸次にこの宇宙を開拓するところの事実」を「新」の側からみれば、伝統に対する報恩ということになるのであるが、その「新」もいつまでも「新」であり続けることはなく、いずれ「旧」の側に立って、次の「新」を育てる立場になるはずである。したがって、上記の報恩の原理は、立場を代えれば、次のように変換されて、義務先行の原理の基本ということになると考えられる。すなわち「人間が天功を助くるところの宇宙間の系列の一員としての義務を尽くさねばならぬという事実を大悟し、しこうしてその真理大悟の結果として新しい世代もしくは他を育成しようとするに至るところの人間社会における公明正大なる自然的道徳法であります」と。

このように考えると、ここでいう義務先行の原理も、権利は義務の先行より生じるという法律論の側面よりも、「天功を助くるところの宇宙間の系列の一員としての義務」の面が大きくクローズアップされるのである。

⑤ 人心の開発・救済に尽力する（人心開発・救済の原理）

この人心開発・救済ということに関しては、『道徳科学の論文』では「第14章第10項 最高道徳は純粹正統の學問に依拠して人間の精神に対し眞の開発をなすことを究極の目的となす」と「第11項 最高道徳の実行は自己の救済されることに帰着す」で扱われている。他の4つの原理に比して圧倒的に多くの頁数がこの2項にあてられていることから、この原理の重要性がうかがわれる。また、cosmic modesty ということから考える時、既述の第二版自序文に明らかのように、廣池は、人心開発・救済がその究極の原理と考えていることがわかる。いいかえれば、人

間が宇宙の一員として、天地の法則に従うという意味での cosmic modesty の最終段階は、この人心開発・救済をめざして努力することであることがわかる。すでに一度引用した箇所であるが、この原理が究極の原理であるとの観点から、その要点をもう一度とりあげてみよう。

「天地の公道」すなわち「人間としては何人も行わねばならぬところの道」と申すのは、この宇宙の組織されておる原理を指すので、その原理と申すは、万物相互に助け合うこと、すなわち相互扶助の原理によりて、万有が階級的にもしくは平等的に調和し、もってこの宇宙が組織されておることであるのです。・・・人間が自我を離れて、かかる真理を物質的だけでなく、精神的に、人心の開発を目的にして行う場合に、「人間が天地の公道に従うた」と申さるるのであります。すなわち、人間が利己的本能を去って、純真至誠の精神にて、比例的慈悲もしくは比例的待遇を実現して、人心の開発を目標に努力する場合に、はじめて「人間が天地の公道に従うた」といふ得るのであります。(廣池、1985、① p. 3～4)

ここには、cosmic modesty の考え方の積極的かつ徹底的な展開として、宇宙自然の法則に従うということ、いいかえれば、天地の公道に従うということの最終的段階は、以上のような宇宙の一員としての人間の自覚に基づく生き方が地球上のすべての人々に理解され、共有されるようになることを目指して努力することであることがわかる。

4. まとめ

廣池千九郎がモラロジーによって提示した最高道徳をここまでみてくると、そこに見られる cosmic modesty の考えは、ただ言葉どおり、広大な宇宙を前にして、人間がいかにかちっぽけな存在であるか、という認識に基づく人間の謙虚な態度・生き方、というだけではないのである。そこにある宇宙とは、ただ天文学的な宇宙、つまり、マクロ・モスモスだけでなく、ミクロ・コスモスも含まれ、人間を含むすべての存在がそこにあるのである。そのような宇宙に対して、精神をもった人間が、自己の立場を正しく理解し、すべての存在に対して、適切な関わりをもつということをもって最高道徳と呼ぶとすれば、それはまさに cosmic modesty という考え方の積極的かつ徹底的な展開といえるであろう。

一般に、人間が何らかの対象と関わる際の関わり方を考える時、そこには、大きく3つの関わり方があるように思う。第1は、対象の存在を知らず、無知・無関心の特徴とする関わり方である。第2は、対象の存在は知っているが、その関わりは部分的な場合である。自分に必要な限りで対象を理解し、利用しようとしたり、「敬して遠ざける」といった態度はこの部類の関わり方であろう。そして第3は、対象の存在を知り、大きな関心をもって対象を理解しようとする場合である。廣池は、「宇宙自然の法則に従う」といい、「天地の公道に従う」ということを繰り返し述べているが、「従う」ということは、その対象との関わり方でいえば、第3の関わり方といえるのではなかろうか。そして、このような関わり方こそ、最も人間にふさわしい、modest な関わり方といえるように思う。

廣池自身は cosmic modesty という言葉を使うことはなかったが、「宇宙自然の法則」、「天地の公道」に従う道として示した最高道徳の原理は、最も徹底した意味での cosmic modesty の具体的展開といえるように思う。

参考文献

- 廣池千九郎(1930)『新科学モラロジー及び最高道德の特質』モラロジー研究所
- 廣池千九郎(1985)『新版 道德科学の論文』モラロジー研究所(初版、1928)
- 廣池千九郎(1991)『回顧録』モラロジー研究所
- 村上和雄(2000)『いのちのすばらしさ あなたの遺伝子が目覚めるとき』モラロジー研究所
- 村上和雄(1999)『サムシング・グレート 大自然の見えざる力』サンマーク文庫
- モラロジー研究所研究部編(1978)『研究ノートNo. 111 ラワリーズ先生の講演及び研究会記録(1977年)』モラロジー研究所研究部、
- ラワリーズ, J. A. (1977)「民主主義教育とモラロジー」『社会教育資料第71号』モラロジー研究所
- ラワリーズ, J. A. (1980)「国際社会とモラロジーの役割」『社会教育資料第76号』モラロジー研究所
- ラワリーズ, J. A. (1981)「人生の意義」『モラロジー研究No. 10』、モラロジー研究所